

高い相関性が得られた。これらのデータは、今後、将来の永久歯列の状態を予測する参考になりえるものと思われた。

演題3. 平成5年度解剖学実習において遭遇した眼窩下孔副孔の一例

○寺田 裕, 鶴田 博文, 相場 隆広*
 鮎瀬 淳*, 荒 光毅*, 藤村 朗**
 野坂洋一郎**

岩手医科大学歯学部4年

*岩手医科大学歯学部3年

**岩手医科大学歯学部 口腔解剖学第一講座

平成5年度歯学部解剖学実習において、眼窩下孔下内方に副孔を有する一例に遭遇した。実習の最終段階において発見したため、孔内を走行する神経が顔面に出現した後の分布は不明であったが、骨内の走行を追及することができた。

本症例は平成5年度歯学部解剖学実習で用いた41体82側中1側に認められた。副孔の出口はすでに剖出が終了しており、正確な計測は不可能であったが、本来の眼窩下孔とほぼ同じ大きさであった。末梢から中枢に向かって、副孔で認められた神経の剖出を進めると、副孔内側縁から9.8mmのところ下方に向かう分枝が上顎中切歯に入り込んでいた。さらに中枢側に剖出を続けると、上顎骨体内側壁内をほぼ水平に後方に向かい、後壁でやや下方に向きを変えながら骨壁を貫き、上顎結節から翼口蓋窩に出て翼口蓋神経節の下方5.6mmの大口蓋神経に合流していた。すなわち、大口蓋神経の分枝が上顎結節から上顎骨内に侵入し、上顎骨体内側壁を前走し、上顎中切歯および顔面に分布していた。過去の報告では、日本人の眼窩下孔副孔の出現率は10～30%と高いが、そのほとんどは眼窩下管内、または眼窩下溝での分岐した眼窩下神経の枝の通路となっているようである。今回報告した、大口蓋神経の分枝が上顎中切歯に分布したという報告は、演者らが涉猟したかぎり見当たらない。本例の神経は、分岐型から、大口蓋神経の分枝が上顎中切歯に分布したという見方や、上顎神経の後上歯槽枝の分岐および走行異常という見方もあるが、上顎中切歯への分布から、前上歯槽枝の走行異常と考えるのが妥当と考えられた。臨床的に、眼窩下孔伝達麻酔の際、上顎前歯部に知覚が残存することがまれにおこり、切歯管内を走行する鼻口蓋神経の分布が考えられているが、この神経

は上顎中切歯に分布しないことが報告されており、本症例のような異常走行を示す神経分布が原因とも考えられる。

演題4. 試験成績と学生による講義の評価

○佐藤 方信

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

近年、大学の自己点検と自己評価の問題が取り上げられ、大学教員に研究能力のほか、教育能力の向上の重要性が要請されてきた。教育は教師の側とこれを受ける学生側の複雑な要因によってその効率が大きく左右される。学生の成績の評価は通常試験の成績により判定されているが、これまで教師が評価される事はなかった。

演者は自分の講義が学生にどう理解、評価されているかを知る目的で学生の試験成績を講義時の着席位置と欠席回数との関連および講義に対する学生の評価などについて検討した。

対象・方法：歯学部4年生の病理学の講義を対象とした。講義の際に講義室の机椅子の配置を記した着席表を回覧し、各自着席している椅子の位置に自分の学籍番号を記入することで出欠をとり、8割以上着席している位置をその学生の着席位置とした。これらの着席位置に基づき前4列をA群、中3列をM群、後3列をP群、そして位置の定まらない学生をN群とした。欠席回数と試験成績の関連の検討は47回の講義回数の中、全て出席した群(I)、1～4回欠席群(II)、5～9回欠席群(III)、10～14回欠席群(IV)の4群に分けて行った。試験成績は3回の試験の平均点を用いた。講義の評価は現在東海大学で使っている17評価項目について行い、記入にあたって学生には着席しているブロックのみ記入させ、氏名は記入させなかった。

結果：試験の成績(SD)はA群(38名)が72.7点(10.7)、M群(36名)が67.5点(8.4)、P群(11名)が65.3点(7.0)であり、N群(10名)は66.6点(7.9)と、概して悪く、留年者の半数(6名)はN群の学生であった。欠席回数と試験成績(SD)はI群(20名)が72.5点(11.3)、II群(39名)が70.2点(9.6)、III群(27名)が67.1点(7.5)、IV群(9名)が65.3点(8.0)で欠席回数が多くなるに従い試験の成績が悪い傾向が示唆された。講義に対する評価ではMおよびP群の学生に比較してA群の学生による評価が厳しかった。また、学生の自己評価ではP群の学生が自分自身に甘い